

「青年よ、大志を抱け！」

川 端 壮 康 (人間心理学科准教授)

この有名な言葉は、札幌農学校（現北海道大学）初代教頭である William Smith Clark 博士が、札幌農学校 1 期生との別れの際に語ったものとされている。この言葉については、実際は後世の創作であったという説や、本当は、”Boys, be ambitious like this old man.” であったという説など、実のところ諸説あるようである（北海道大学図書館報『楡蔭』No.29）。

だが、史実に関する議論はともかく、この言葉が、若者らしい、未来に向けて力強く生きる力を鼓舞するものであることには異論がないのではないかと思う。私の本学での教育の抱負は、この言葉にあるような「大志（野望）を抱く青年を養成すること」である。

こう大きなことをいうと、いささか以上に自己の現実とは落差がある気がしないでもないが、私は本気でそう思っている。なお、私がここで考えている大志（野望）とは、自分勝手な欲望としてのそれではなく、人生のミッションを意味するものであり、それは本学の教育理念である、「キリスト教精神と豊かな教養によって内面をはぐくみ、他者への愛と奉仕の心をもって社会に貢献する人間を育成する」とも、合致しているのではないかと思う。

1. 尚絅学院大学の学生と接していて感じること

本学の学生についての私のイメージは、「おとなしい」「引っ込み思案」「おっとりしている」「自信があまりない」といったところである。最近では、やや毛色の変った学生の姿もチラホラと見られるようになったが、おおむね、おとなしい学生が多いのではないかと思う。授業などでも、指示したことに従う素直さがあり、それはそれで良いと思うが、そのことはまた、指示されないと自分から積極的・主体的に動こうとしないことでもあり、教える側からすると物足りなさを感じることも多い。

これは、本学の学生に限ったことではなく、多かれ少なかれ、現代の大学生に共通する特徴のようである。

例えば、平成 19 年の中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」では、「学習意欲や就労・勤労意欲の低い青少年が増えつつあるのではないかという懸念が生じている。また、学習や労働といった具体的な対象への意欲の減退だけでなく、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲そのものが減退しているのではないかと懸念されている。」と指摘されている。

また、財団法人青少年研究所が 2011 年に実施した、日本、米国、韓国、中国の高校生それぞれ千人以上を対象とした意識調査によれば、日本の高校生は、自己評価について、ポジティブな項目全般に肯定率が低く、特に自分は価値ある存在であると思う自尊心は米中韓の半分以下の水準であり、ネガティブな項目について、「自分はダメな人間だ」「人並みの生活ができれば十分だ」といった項目での比率が際立って高かった。さらに、日本の高校生は、将来への展望について弱く、「高い地位に就く」「社会の役に立つ」「お金持ちになる」については、非常に低い値であった。

より心理学的な面に踏み込んだ研究では、岡田（2012）では、現代の青年の友人関係の持ち方には、他人から傷つけられることを恐れて回避することが、友人を傷つけることを回避する

ことにつながり、それによって相手から拒否されずに受容されていると感じ、結果的に自尊心が維持されるという構造があることが見出されている。すなわち、ある意味で「やさしく」て、繊細な感性を持つ現代の若者の友達付き合いの背景には、自らの自尊心を維持しようとして、自他ともに傷つくこと・傷つけることを避けようとする怯えのようなものがあるのである。

こうした現象の原因として、先にあげた中央教育審議会答申では、「意欲に欠ける」青少年の様相と原因を以下の3分類7類型に整理している。

ア. 基礎的な体力が十分に培われていないため、意欲を持てなかつたり思考や行動に集中できなかつたりして、持続力もない状態。

イ. 青少年の価値観等と社会的期待との相違

- ① 将来に向けて学習したり努力したりすることに希望や価値を見いだせないため、学習や努力に対する意欲を持ってない状態。
- ② 意欲や行動が社会のルールやマナーを逸脱しているため、その意欲や行動が評価されない状態。
- ③ 意欲の対象が自己完結しているなど、他者とのかかわりや社会とのかかわりの中で達しようとする目標を持っていないため、その意欲や行動が評価されない状態。

ウ. 意欲を行動に移す段階でのつまずき

- ① 意欲を持っているが、行動することへの負担感が大きいなどの理由により、意欲を実現するための行動に移せず、行動する前にあきらめている状態。
- ② 意欲を持っており行動しようとする、あるいは既に行動し始めているが、適切な手段・方法が分からずに迷っている状態。
- ③ 意欲を持っており既に行動したが、失敗したこと等による徒労感、絶望感から抜け出せず、改めて挑戦する意欲を持って行動できない状態。

2. 現代に求められる若者とは

こうした研究を踏まえ、改めて本学の学生について考えてみると、上記イの①や③、あるいはウの①の状態の者が多いのではないかと感じられる。現状に漠然とした不全能を抱きながらも、どうしたらいいか分からずに途方に暮れているという姿が浮かび上がってくるように思われる。実際に、進路就職指導その他で本学の学生たちと話をしていると、「自分は何をしたいのか分からない。」「何ができるのか分からない」「どうしたらいいのか分からない」と、「ないない」づくしで、こちらの方が途方に暮れることも多い。これまで生活、学業、進学等の多くの面で、周囲から守られて、特に困難に直面することもなく過ごしてきた学生たちは、今の自分とは違う「何か」を求めながらも、岡田（2012）が友人関係について述べているように、人間関係以外のことについても、現実にはぶつかって行って傷つくことを恐れて身動きできないのではないかと感じられる。

しかし、社会が求めている人材は、そうした現代の若者の姿とはかけ離れている。例えば、産経新聞と駿河台教育研究所は、2012年、東証1部上場企業106社及び全国の338の4年制大学に対し、「時代が求める人材像」についてのアンケート調査を行っているが、その中で、『「期待する人材像」に共通して必要と考える姿勢を『一言』で集約すると、どのような言葉になるか』という問いに対して、大学も企業も、それぞれ1位が「挑戦」であり、2位が「志」と答えている。そして、これらの育成を「阻害」しているものとして、最も多く挙げられたのが、

「物質的な豊かさ」「ゆとり教育」「過保護な家庭環境」であったとされている。

これは、この激動の時代に、日本社会が求める若者の姿であると思われる。現代のように、あらゆるものがドラスティックに変化していく社会においては、ハングリーに、リスクをとって挑戦していくような気概が必要ということであり、そうした挑戦を支えるのは、何かを成し遂げたいという志であろうということであろう。

少しわき道にそれるかもしれないが、学生たちの話を聞いていると、昨今の厳しい就職事情から、ややもすれば「会社の仕事内容よりも、安定性や待遇」を求めて就職活動する学生も少なくないようである。しかし、私は彼らには、「夢のない就職はしない方がよい。」と説くことにしている。現在の社会情勢を鑑みれば、どこに就職しても結局は困難から逃れることはできないのであるから、どうせそうなならば、自らの人生のミッションについてじっくり考えた上で、仮に最初の就職は望み通りでなかったとしても、しっかり将来を見据えたうえで就職先を選択してもらいたいと思っている。

3. 大志（野望）ある学生を育てるために

それでは、実際に、どのすれば大きな志や野心を持った学生を養うことができるのかという点については、実のところ、試行錯誤で手さぐりをしている状態である。

そうした中、現在、ヒントになるのではないかと考えていることがいくつかある。まず、本学の多くの学生は、とりあえず「何か」を求める気持ちは持っているということがある。彼らに必要なのは、一步を踏み出すきっかけと方向付けである。それからまた、学生の多くは、就職活動など社会との接触を通じて、それなりの「何か」を得て、成長していくということがある。就職して1年も経った学生と再会すると、在学中とはまるで変わって、表情は精悍になり、しっかりとやりたいことについて語るなど、その成長に驚かされることが多い。これは、社会に出て、否応なしに現実の課題を乗り越えていくという経験を積んだことで、タフさを身につけていったのではないかと私は考えている。しかし、社会に出てからは、現実の制約も学生時代とは違って格段に多く、描かれる夢は現実に縛られた小さなものになりがちであり、学生時代に可能であったように、自由に大きな夢を描くということではできにくいのも事実である。

そこで、最近では、私の専門である児童や少年の非行や問題行動に興味と参加意欲がある学生には、交流がある児童自立支援施設や児童相談所などでの職員補助のアルバイトを紹介したり、私自身が参加している問題を有する児童を対象としたグループワークに補助として参加させる機会を与えることで、学生に現場・現実の問題と主体的にかかわる機会を与えることを試みている。こうした経験は、本人の将来への志望とうまくマッチすると、確かに学生の意欲を喚起する効果があるようで、もっと深く勉強してみたいという思いや、専門職として羽ばたきたいという夢・野望を与えるようである。また、それとも関連するが、これも意欲がある学生には、専門的な勉強会を始めてみてもいい。これについては、効果は今のところ分からないが、同じく学生の夢を伸ばすことに役立ってほしいと願っている。

また、自分から踏み込んで他人と付き合うことが苦手な学生たちに対し、レクリエーションや飲み会といった、他人と親しく語り合うことができる機会を設けることも必要であろうと考えている。そうしたフランクな場で、普段はなかなか聞く機会・語る機会のない夢や野望について、お互いにのびのびと語らせることが良いのではないかと思うのである。どんな夢であっても、まずは「語る」という一つの行動を起こすことで、次の行動に結びついていくことを期

待している。さらにまた、私自身が自らの大志（野望）を彼らに語りかけていくことも、ロール・モデルを提供するという意味からも大切なのではないかと考えている。

4. 最後に

未熟者がやたらに大きなことを述べてしまったが、「現在から未来へ」を志向する内容という原稿依頼であったので、自らの夢（野望）を大きく語ったということで御容赦いただきたい。これから、ここで述べた抱負に向けてコツコツと努力していくことが大切なのであると考えている。

尚絅学院での研究・教育に対する抱負^{※1}

池田和浩（人間心理学科講師）

はじめに

研究履歴：朝、起床して身支度を整えたのち、職場へ向かい、どの仕事から片づけなければならないか、山のような書類を見て思い悩む。日々の生活の中で、私たちは、何をしなければならないのかを意識することが多くあるが、「自分が誰であるか」を特に意識することは少ない。なぜならば、“昨日の私”と“今日の私”は時間的連続線上に存在する同一の人物であることを無意識的に理解しているからだ。ここに寄与しているのが“記憶”である。つまり、人は“自分自身に関する記憶の変化の少なさ”を拠りどころに、自己の同一性を確認していると言える。

しかしながら、通常考えられているよりもはるかに大きく、記憶はその形を変える。高齢者になれば、「最近、物忘れが激しくなった」や、「昔に比べて新しいことを覚えられなくなった」と意識する確率が高くなるだろう。では、大学生のような“若い脳”を持つ若年層には記憶の変化が起きにくいということであろうか。右図を確認していただきたい（図1）。これは、本学の学生が世界的に有名なアニメキャラクターを記憶スケッチした結果である。



図1. 某キャラクターの記憶スケッチ

どの年代層においても人の記憶は容易に変化することが予測できる。“最も強いものでもなく、最も賢いものでもなく、最も変化に対応できるものがこの世に生き残る”との考えを種の起源のなかでダーウィンが著したのは有名な話である（実のところ、この記述をダーウィン自身が著したわけではない）。この考えに基づけば、我々は、記憶を“変容させる力”を身に着けることによって様々な恩恵を受けてきたと予測できる。筆者はこれまで、“記憶の変容”と“語り直し”をキーワードに認知心理学的観点から一連の研究を行ってきた。複数の実験的検討を行った結果、辛い体験の記憶を“肯定的”な側面から語り直すことは、保存されている記憶そのものをポジティブに変容させることが確認された。辛い記憶をいつもとは少し違った側面からポジティブに語り直すことには、“変化”による恩恵をもたらす作用が存在するとい